

哲学歴史学科

世界史コース

World History

哲学歴史学科

日本史コース

Japanese History

日本史コースについて

日本史コースでは、各時代につくられた古文書（こもんじよ）などの史料を読み解き、日本の歴史について研究します。市大の日本史コースでは考古学を含め古代から近現代までを学べます。「日本史」が対象とする領域は広く、各時代の歴史的な事件だけでなく、人々の生活や意識、国家支配や社会の変化、法や経済文化など、どんなテーマでも、史料にもとづいて分析するのであれば対象にできます。

市大日本史では各教員が大阪の都市史・地域史も研究しており、全構成員が参加し和泉市と協力して古文書調査、聞き取り、フィールドワークを実施する合同調査（全国的に類例がない）を毎年実施しています。フィールドに出ての実地調査と座学の両方が好きな人にオススメです。

世界史コースについて

このコースには7名の教員がいて、ユーラシア大陸の東から西まで、時代も4世紀ごろから現代までと、地域も時代もまんべんなく専門のスタッフがそろっています。外国の歴史、日本と海外との交流史、比較史などが研究の対象となりますので、こうしたことに興味のある学生さんに入ってきてほしいと思います。

グローバル化する世の中で歴史問題を議論することは非常に重要ですが、日本人が世界史を勉強する意義は大きいです。歴史を議論する際には、まず学説を整理し、そこで語られていない事実を史料にもとづいて明らかにする、というのが国際的に受け入れられている作法になります。世界史コースでは、この作法に則った歴史問題の考え方を教員・学生で考えています。

先生の研究

主に3つのテーマを研究しています。1つ目は近代（明治以降）大阪の都市社会史です。大阪の民衆がどのように働き、暮らし、何を考えながら社会のうねりにどう巻き込まれたのかについて、大阪の中の様々な地域を取り上げて研究しています。2つ目は戦時中の動員体制と民衆生活の実態についてです。政府や軍の総動員政策が、地域に暮らす人々の生活にもたらした影響や矛盾について研究しています。3つ目は近世〜近現代の遊廓（ゆかく）の社会史的研究です。日本列島全域や植民地にまでおよんだ各時代の遊廓地を調査し、女性を搾取して性売買を行なわせたり遊廓の社会構造と実態について、都市史やジェンダーの観点から研究しています。



教授 さが あした 先生 佐賀朝

○コースを選んだきっかけ 高校の授業で日本史を好きになり、その先生に大阪市立大学文学部を勧められたことが最初のきっかけです。また、1回生のときの授業で古代史の論文を読み、日本史の研究がおもしろそうと思えたことも決め手になりました。 ○コースでの学び 出来事どうしを関連づけて考察するという面が大きいと思います。史料読解やフィールドワーク、聞き取り調査などの手法を通じて、多角的な視点で歴史を捉えることができます。それぞれのテーマを専門とする5名の先生方で、全時代の研究がカバーされています。 ○日本史コースの「辞書」 史料を読むために辞書を引きたり、1つの辞書だけではなくもう1つ別の辞書を引きたり、辞書ではない史料を辞書代わりに引いたり……。日本史を学ぶためには多くの辞書を参照しながら、史料に即した読解をする必要があります。



教授 のむら ちかよし 先生 野村親義

先生の研究

私の専門は近現代のインド経済史ですが、日本など諸外国との比較も行なっています。経済発展の過程を研究する際、この背後にある要因を抽出することはとても難しいです。インフレや失業率、財政赤字、為替などほんとうに様々な指標がありますが、どれか1つの要素がよければ全体の発展もよくなる、というものではないからです。これらにバランスよく目を向けながら全体像を掴まなければいけません。文学部の他コースにも共通して言えることですが、この研究の先にあるのは「人間の幸せとは何か？」というテーマだと思っています。体系化された経済学と多様な要素が絡み合った歴史学というのは一見、親和性がないように見えるかもしれませんが、この2つの領域の中間にある経済史学は私と相性のよい分野でした。

林殿さんへのインタビュー

○コースを選んだきっかけ 世界史コースのことを知るために先生の研究室に質問に行つたのですが、このときコースの雰囲気やどんなことを勉強しているのかを詳しく知ることができ、また「この先生に学びたい」と強く思いました。 ○コースでの学び 大学の世界史は暗記とは異なり、すでに存在している文献を読み、そこから新しい発見を積み上げていく作業を必要とします。教科書に書かれていることをただ受け取るのではなく、なぜそのような記述がなされているのかを考える。こういった過程をおもしろいと感じています。 ○コースの雰囲気・PR メンバーに個性豊かな人が多くて楽しいです。西洋の古典を読んだり、様々な知識を持っている人がたくさんいます。



3回生 なかのう まさし さん 中納雅司

中納さんへのインタビュー

○コースを選んだきっかけ 高校の授業で日本史を好きになり、その先生に大阪市立大学文学部を勧められたことが最初のきっかけです。また、1回生のときの授業で古代史の論文を読み、日本史の研究がおもしろそうと思えたことも決め手になりました。 ○コースでの学び 出来事どうしを関連づけて考察するという面が大きいと思います。史料読解やフィールドワーク、聞き取り調査などの手法を通じて、多角的な視点で歴史を捉えることができます。それぞれのテーマを専門とする5名の先生方で、全時代の研究がカバーされています。 ○日本史コースの「辞書」 史料を読むために辞書を引きたり、1つの辞書だけではなくもう1つ別の辞書を引きたり、辞書ではない史料を辞書代わりに引いたり……。日本史を学ぶためには多くの辞書を参照しながら、史料に即した読解をする必要があります。



3回生 はやしどの ななこ さん 林殿七菜子

教員紹介

※2019年度時点

平田 茂樹 教授 Shigeki Hirata 中国の近世社会の政治史、社会史、文化史 『宋代政治構造研究』（汲古書院、2012）

渡辺 健哉 准教授 Kenya Watanabe 専門は中国近世・近代史。北京の歴史、元明時代の科挙をめぐる問題、近代における日本と中国との学術交流の歴史を研究。 『元大都形成史の研究』（東北大学出版会、2017）

北村 昌史 教授 Masafumi Kitamura 近現代ヨーロッパ、特にドイツの社会史 「ドイツ統一と第二帝国」（小山哲・上垣豊・山田史郎・杉本淑彦編著『大学で学ぶ西洋史〔近現代〕』ミネルヴァ書房、2011）

草生 久嗣 教授 Hisatsugu Kusabu ビザンツ史、ヨーロッパ中世史、宗教問題史、異端学 共著『北西ユーラシアの歴史空間 前近代ロシアと周辺世界』（北海道大学出版会、2016）

向井 伸哉 講師 Shinya Mukai 西洋中世史、フランス史、村落史、国制史 「中世後期南フランスにおける都市と農村の政治的関係：ペジェの都市エリートとヴァンドレスの村落共同体（一三五〇—一四〇〇）」、『史学雑誌』、127巻10号、2018年、1-30頁。

野村 親義 教授 Chikayoshi Nomura 近現代インド史 The House of Tata Meets the Second Industrial Revolution: An Institutional Analysis of Tata Iron and Steel Co. in Colonial India, Springer (2018)

上野 雅由樹 准教授 Masayuki Ueno 西アジア近世・近代史、オスマン帝国史 共著『世界史／いま、ここから』（山川出版社、2017）

卒論タイトル例

- ◆ロシア・オスマン両帝国のアルメニア定期刊行物に関する一考察～1870・80年代を中心に～
- ◆アルビジョワ十字軍における第一次トゥールーズ攻囲戦の意義―戦争の転換点として―
- ◆修復に鑑みる《サモトラケのニケ》の美的要素

世界史コースにとって「物語」とは？

「歴史って、しよせん誰かの創作でしょ。」皆さんも耳にする意見だと思えます。場合によっては、創作を物語・小説と言ひ換えることもできるかもしれません。 大学で世界史を勉強するということは、過去の出来事をするだけ一次史料に忠実に、因果関係に十分気をつけながら語る、その語りの「作法」を勉強するということになると思えます。世界中の大学で、こうした「作法」に則った世界史が教えられ、そのため世界で歴史が議論になるとき、語られている歴史が「作法」に則っているか否かが極めて重要な論点となります。世界史学教室では、この「作法」を、学生の皆さんと学んでいます。（文・野村先生）

卒論タイトル例

- ◆昭和初期の大阪における「医療の社会化」の展開と実態―無産者医療運動と都市救療事業の二側面から―
- ◆古墳時代における日常用の食器と煮炊具
- ◆中世後期の貴族社会における穢（けがれ）観念

日本史コースにとって「物語」とは？

歴史学は事実だけを重視すると思われがちですが、歴史上に存在した「物語」も重要な研究対象です。日本史なら、古代の歴史書や説話集、中世の軍記物など、近世（江戸時代）にも、歴史書、文学や演劇作品があります。社会史の視点からは、フィクションである「物語」の舞台設定や登場人物の行動、心情などには必ずその時代の特質、人々の意識が反映されており、それを読み解くことはとても大切です。単に、表現の技法やストーリー展開の特質を、時代や空間を超えた「物語」どうしで比較するだけでは、歴史上の「物語」の豊かさをすくい上げることはできません。大切なのは、物語を創作する人々自身も歴史の一部だということとです。実は、各時代の史料から読み取れる事実の中には「物語」よりも、ずっと奇妙でおもしろく、豊かな物語が含まれます。つまり、歴史的事実自体が、「物語」よりずっと豊かでおもしろい―これを読み解き考察するのが歴史学の醍醐味です。（文・佐賀先生）

